

# Borneo Times

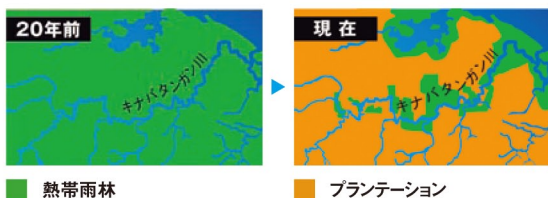
## 動物たちの命をつなぐ 新しい支援が始まる

ハンテイング・ワールドでは2008年よりチャリティグッズを販売し、売上1%をボルネオの生物多様性保全活動に役立ててきた。そして昨年、その成果がひとつのカタチとなり「ハンテイング・ワールド共生の森」が誕生し、野生動物レスキューセンター建設への支援も決定した。



ボルネオ島にだけ生息しているボルネオゾウは、プランテーションの拡大により、生活圏が危ぶまれている。こうした状況から救うためにも、ゾウを保護できる施設の建設が急がれる。ボルネオ島には、このような絶滅が危惧されている野生動物が多数生息する

### ボルネオ島キナバタンガン川下流域の変化



緑色がジャングル、オレンジ色がプランテーションを示す。20年前と比べるとジャングルが激減しており、いかにして森を守るかが大きな課題である

ハンテイング・ワールドが、ボルネオ保全トラスト(BCT)への支援を開始して約4年の歳月が経過した。これまでの支援金は、BCTの活動費や、プランテーションに迷い込んだゾウの救出といったカタチで使われ、昨年8月には「緑の回廊」内に「ハンテイング・ワールド共生の森」が生まれた。

「緑の回廊計画」とは、BCTが行う事業の大きな柱であり、アブラヤシプランテーションなどによって分断されている土地を確保し、野生動物の生息地(保護区や保存林)をつなぐという計画。野生動物が、より広い土地を移動できるようにすることで、絶滅のリスクを下げることができるのだ。

そして、「ハンテイング・ワ

ールド共生の森」は、その分断された保護林を結ぶ、4エーカーの土地に生まれた。そこは、キナバタンガン川下流域野生動物保護区間のルートの位置し、ゾウが食料を探す主要ポイントとなっている。さらに、ゾウがキナバタンガン川河口から上流の森へ行く際に、川を渡るルートの一部でもある。この地域がアブラヤシプランテーションや観光施設として開発されると、ゾウの通り道は影響を受け、農村では人とゾウの対立が増える懸念されたのだ。チャリティグッズ購入という、ユーザーの支援への賛同が、重要な成果へと結びついたのである。少しづつではあるが、緑の回廊は確実に広がりを見せている。

2012年、BCTの活動で最も注目されるのが「野生動物レスキューセンター」の建設だ。現在、プランテーションで農業被害を起こすゾウは捕獲して保護区の森に戻しているが、一昨



BCT 支援の一環として、野生動物の救出活動や調査に使用される調査船と四輪駆動車を、現地野生生物局に寄贈



緑で覆われたジャングルが縮小することで、野生動物は棲む場所と食料を失い、減少の一途をたどっていく

森が見つからないという状態に陥ったため、急遽、第一期レスキューセンターをスタートさせることになった。しかし、それはごく簡易的なものであり、ゾウを保護できる施設の建設が急務なのだ。この厳しい現状を受け止め、これまでBCTをサポートしてきたBCTジャパンが、北海道旭川の旭山動物園とともに設計・建設を担当する。それは、自然の地形を利用した設計、現地駐在のスタッフだけでなく、工事や修理が行いやすい工法など、日本企業の知恵と技術がふんだんに活かされたものとなる予定だ。そして、ここにもチャリティグッズによる支援金の一部が活用されることとなる。

ハンテイング・ワールドが目指す「自然との共生」の実現に向けた、このボルネオの生物多様性保全活動への支援は、チャリティグッズを通じたユーザーの理解と協力を得て、確実な成果となって一つひとつ具現化しているのである。